惜しみなく与える神の愛

牧師　和田 忠三

今年もあと約一か月。全国各地で、台風や豪雨などによる被害が相次いだ年でしたが、お互いに守られている事を感謝しましょう。

年の終りに、温もりを感じるクリスマスを迎えられるのは嬉しいですよね。前回は聖書の中で、「いつまでも存続するもの」として挙げられている「信仰と希望と愛」の内の、「希望」を取り上げましたが、今回はクリスマスの前ですので、「愛」を取り上げます。

○欠かすことのできない愛

わたしたちが生きて行く上で欠かすことができないもの、それが愛です。「愛」といっても、日本語の愛は、男女の愛・夫婦の愛・親子の愛・兄弟愛・友愛・師弟愛・民族愛・人類愛などと幅広く使われています。辞書によって多少異なりますが、「可愛がり大事にすること」「キリスト教ではアガペーの訳で、神が人類のすべてを無限にいつくしむことを言う」などと説明されています。そこで大きく「人間の愛と神の愛」とに分けて、見比べてみましょう。

○人間の愛

育児には、大変な時間と労力とお金がかかります。しかし、それらの犠牲にはるかに勝る親の愛情があるからこそ、子どもは育って行くのです。また、貧しい人や困っている人に手を差し伸べる人々、病や貧困の解決に真剣に取組む人々などによって人類は保たれ、生かされているのです。

しかし、人間の愛には限界が有ります。育児や介護で疲れ切って虐待や、心中する場合もあります。自分を助けるために他者を犠牲にしてしまったり、裏切る場合もあります。自国の益のために、他国を不幸にする場合もあります。このように、残念ですか人間の愛には限りがあり、それが現実なのです。

○惜しみなく与える神の愛

先程の、「愛」についての辞書の説明で、「キリスト教ではアガペーの訳で、神が人類のすべてを無限にいつくしむことを言う」とありました。分りやすく、良い説明です。

(1)人類のすべてを愛する神の愛

普段わたしたちは、良くしてくれた方や、大切にしておいた方が良いと思う人を大事にし、嫌な人や益とならない人は避けます。ところが聖書が示す神さまは、すべての人を愛の対象とされるのです。神さまに背を向けている人や無関心な人、どうしようもないような人さえも、愛の対象とされるのです。

(2)無限にいつくしむ神の愛

神さまの愛は無限です。惜しみなく無制限に与えて下さるのです。その最高の表れが、「イエス・キリストの十字架」です。

本来、聖なる神さまの前に、自己中心のわたしたちは裁きの対象でした。「分かっているが、自分ではどうすることもできない」それがわたしたちでした。そんなわたしたちを憐れまれた神さまは、わたしたちを救い、豊かな祝福と恵みを与えようとして、独り子のイエス・キリストさまをこの地上に遣わして下さいました。それがクリスマスです。そして、わたしたちの身代わりとなって十字架に掛かられ、神の激しい怒りと呪いの全てを引受けて下さったのです。神さまの愛の現れクリスマスを心から喜び、感謝しましょう！最後に聖書の言葉を紹介して終ります。

「神は愛である。神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それにふって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。ヨハネの第一の手紙４章８～９節」

「キリストの降誕」
オランダの画家ホントホルスト1622年の作品。

馬槽のなかに　うぶごえ上げ　木工の家に　人となりて
貧しき愛い　生くる悩み　つぶさになめし　この人を見よ

食する暇も　うち忘れて　虐げられし　人を訪ね
友なき者の　友となりて　心砕きし　この人を見よ

聖歌99番「馬槽の中に」より

あかし

一粒の麦

片山トキ

私は今年八十七才になりました。あと三年で九十才になると思ったら、八十七年の年月の重みを感じて、この永い年月を振り返ってみました。

幼い頃は、病弱の母の枕元で、人遊びをしていて、いつも良い子でいました。

しかし成長するに従って、「本当の自分は裏表があって、決して良い子ではない」と気付いていました。ですから、その自分が嫌いで、許せませんでした。

太平洋戦争が始まって、戦死した姉の主人が、私の生涯に関わる大切な言葉を残してくれていました。「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」。その頃は、それが聖書の中の言葉とは知りませんでした。

父も召集され、母も亡くなった後、女子供四人の生活は、不安で一杯でした。私は学徒動員で大阪の十三の工場へ通っていましたが、ある時、空襲にあい、燃える火の中を命からがら逃げ帰った豊中も、燃えていました。

敗戦になり、売り喰いの生活でしたが、その中から姉たちが私を洋裁学校に通わせてくれました。戦争から帰った父が病んで家にいましたので、私が家で洋裁をしていたのですが、そのお客様の中に、クリスチャンの婦人がいました。来られる度に時間を かけて聖書の話をして下さいました。

その方は、厳しい男社会の中で八人の家族を抱えて働いておられたのですが、いつも穏やかで豊かな感性をもって人を包み込み、大勢の方に頼られていましたのもあのころ、あのときの中に、義兄が残してくれた先程の言葉が有り、「義兄も聖書を読んでいたのだ」と思うと、嬉しくてたまりませんでした。

「一粒の麦」、「一粒の麦」、とおまじないのように唱えていた言葉が、実はイエス様の教えで、「イエス様ご自身が一粒の麦となって死んで下さったから、信じる者は救されて救われる」とはっきり分りました。

その方の家で行なわれていた集会に日曜ごとに通いましたが、ある年のクリスマスのみ言葉交換で、次のみ言葉が与えられました。

「キリスト・イエスにある命の御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである。」私は、「自分が嫌いで愛せない。だから他人も愛せない。こんな私にも生きる価値はない。私に出来るたった一つの善いことは、私に似た者をこの世に残さないこと」と決めつけていましたが、大きな間違いでした。「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい」とおっしゃるイエス様が私を愛し、生かして下さっているのですから、自分を否定するのはイエス様の御心ではなく、イエス様に愛されている自分を認めることが、一番大切なことと分ったのです。

その後、誰一人の知り合いもないのに飛び込んだ教会で洗礼を受け、ご近所のクリスチャンの方とも知り合い、教会生活は楽しく充実した日々でした。

目の前にある天国への道には、なお恐れや不安もありますが、その時こそ、イエス様のみ声を聞く最も良い機会です。「安かれ、と平安を与えて下さり、真実をもって導いてくださるイエス様に寄り頼んで、今日を生きています。

イエス様に、ハレルヤ！

2003年頃お姉様と
左が片山さん